

教養総合Ⅱ 美術制作から学ぶ歴史 授業記録

～ コロナパンデミック下のオンライン授業の実践記録 ～

大橋里沙子
清水康秀

〈キーワード〉 教科横断型授業 美術史 コロナパンデミック デザイン

1. はじめに

2019年度～2022年度の4年間にかけて大橋里沙子、清水康秀が連携し行った教養総合Ⅱの「美術制作から学ぶ歴史」の授業実践の記録である。2020年度より突如起きたコロナパンデミックの状況下、どのように授業を行ったかを含め、本稿はコロナ禍のオンライン授業での授業報告実践も含めた当時の授業状況の記録である。

「美術制作から学ぶ歴史」は、本校の教科横断型学校設定科目である教養総合Ⅱの中で、設定した授業である。基礎的学力の定着を図るとともに、多様化する社会への対応を図る教育を実践している。教育をより充実したものとするため、美術科、世界史の分野横断的な知識を習得し、画力を上げることや世界史の知識をただ暗記することではなく、幅広い視野で課題を捉え、様々な技術や情報を使いこなして解決に導く力の育成を目指した。この急速な社会変化に伴う多様な需要や課題に対し、幅広い知識と柔軟な発想力で臨んでいける「行動力」「分析力」「表現力」といった能力育成を目指した。美術科、社会科世界史教員の互いの視点から、美術制作や鑑賞から世界史の知見を広げ、新しい角度から新時代を見つめるための授業構成を考えた。

2. コロナ禍において

2020年3月2日、多くの人にとって信じられないことが起こった。コロナパンデミックによる突然の一斉休校は、日本中の人、また教育現場にも大変な混乱をもたらした。この先の未来、何が起こるか全く分からない、全ての人がそう感じた3ヶ月の休校期間であった。現在は（令和4年11月）with コロナという状況下、3密を避けた日常が戻りつつある。しかしグループワークなど密になる制作を自由に行うことへ以前より神経質になり過剰に反応してしまい「共同して創り出す活動」という美術教育の翼をもぎ取られてしまっているかの

ように感じる。その後今に至るまでの4年間、私たちはマスクをしてのコミュニケーションが当たり前となり、顔の全貌や表情が読み取りにくい中、授業を行っている。その不便さや違和感は生徒教員双方感じている。ソーシャルディスタンスを重視し、普段の仕事に消毒作業などの業務も追加し、相変わらず忙しい日々には忙殺されてしまっているが、一度立ち止まってコロナ渦の中で行った実践報告をまとめたい。休校期間で得られた経験も用い、新しい発想で、生徒の学びを止めないようにしなくてはいけない。当時一番大切にしたいと考えていたのは今の生徒の心と向き合うことと学ぶ機会を奪わないこと。自粛期間の中では、状況下で日常のデザインや美術、自然物の造形の美しさに目を向ける機会にしたいと考えた。

3. 授業実践

「大切な人を守るマスク ～コロナパンデミックの中で今、私たちに出来ることを考える～」

※休校中オンラインによる授業

「創造力で今、私たちに出来ることを考える。」

当時(2020年5月)マスクの形状は基本的に同じであり深刻なマスク不足が問題であった。安倍政権下、不織布マスク不足の解消を目的として、布マスクが全国民に配布された。そのような状況下、ステイホームを強いられている生徒たちに「今、自分には誰かのために何が出来るか」考えてもらいたい。

●オンラインによる導入

「私たちは今コロナパンデミックという世界史の中にいる」

導入は google meet を使用してリアルな時間共有の中で行った。「久しぶりに会えましたね。」とお互いに顔を見合わせた後、清水教諭より「私たちは今まさに世界史に残る事態の中にいる」と感染症と美術作品について講義を行った。

●14世紀のペストの流行と美術作品の関係について

コロナ禍をきっかけとして、中世でのペストや20世紀のスペイン風邪などの流行がメディアで再注目された。そのため、過去の感染症が絵画に与えた影響を本授業で取り上げた。

具体的には、3世紀のローマ帝国で活動したキリスト教の聖人である『聖セヴァスティアヌス』(図1)の例を解説した。セヴァスティアヌスはもともと、ローマ皇帝のディオクレティアヌスから親衛隊長の長に任命された軍人である。しかし、キリスト教が禁じられていた当時、彼はその教えを広めたため、弓矢による死刑の判決を下された。その後、息絶えたと思われたが、どの矢も急所を外れており、矢で射たれても死ななかったという奇跡が伝えられている。そして、イタリア初期のルネサンスを代表するアンドレア・マンテーニャをはじめ

として、14世紀後半から聖セヴァスティアヌスを主題とする作品が多く残された。3世紀に活動した聖人が14世紀後半になって度々描かれるようになった背景には、当時流行したペストが深く関係している。

14世紀に流行したペストの発生地は、おそらく中央アジアだと考えられている。これがヨーロッパに流れ込み、1347年頃になるとイタリアのジェノヴァで被害が確認された。その後、感染はさらに拡大し、フィレンツェの人口9万人のうち4万人余りが、シエナでは、周辺地域を含めた人口9万人のうちおよそ8万人が亡くなったとされている。

こうした多くの人々の死は、当時の人々に大きな動揺を与えた。キリスト教を信じるヨーロッパの人々の間では、鞭打ち行者が流行した。ペストによる死を神罰と捉え、群衆は悔い改めると叫びながら、お互いにあるいは自ら鞭を打ちながら行進する姿が見られたのである。そのため、人々はペストに感染することを恐れ、万が一感染したとしても、矢で射られても死ななかつたセヴァスティアヌスのように助かりたいと思うように考えた。つまり、聖セヴァスティアヌスの絵画における「矢」は「ペスト」と捉えられ、14世紀後半にこの主題が多く描かれることになった。人々はペストの流行の中で聖セヴァスティアヌスを願掛けの対象とみなしたのである。絵画が描かれることには、歴史的な背景が深く関係している一例として、このエピソードは効果的であると考えた。

今、21世紀では何が出来るか。現在、感染症の原因がウイルスによる感染であることは解明されている。私たちは今、創造力、発想力、デザインの力、行動力で人を守ることが出来る。画面越しに頷いてくれる生徒の顔が見えた。

課題

新型コロナウイルスの感染予防に向けて、手洗い、うがい、マスクの着用が義務化されています。自分の体を守ることは周りの人の健康を守ることに繋がります。つまり相手を大切にすることは、自分も含め、同じ社会に生きている人の安全にも広がっていきます。

さて、あなたが誰かを想う気持ちをマスクを考えることで形にしてみましょう。あなたは大切な人が危険に晒されないようにするためにはどうすればいいと思いますか？現代では美術の力でどんな事ができるでしょうか？そのためにはどんな形でどんな方法が良いでしょうか。マスク不足の今だからこそ、みなさんの力が必要です。

100文字以上で作品のコンセプト、キャプションも添えて、写真を3枚撮影し、課題フォームから提出してください。

材料は、基本的に「どこの家にもあるもの」制作してください。

本授業はオンライン授業期間中に実施したため、事前に録画した動画を YouTube（図2）にアップロードする形で実施した。動画では、ホワイトボードに授業の内容を予め書き込んでおき、それらを解説する形で実施した。生徒は事前に配布されたプリントに穴埋めをしながら、動画を視聴したため、双方向的な授業にはならなかった。しかし、動画では教員だけではなく、生徒役に見立てたキャラクターに音声ソフトで声を入れて、本来の授業と同じような生徒と教員との掛け合いを意識的に取り入れた。また、通常の授業よりも、画像を鮮明に見せることができるため、多くの絵画資料を取り上げることができた。授業後は Google Form での感想や内容の理解を確認する問題を課し、フィードバックを行った。

4. 生徒作品

●機能に注目したマスク

〈生徒 M 作品〉図 3、4

私の制作したマスクのターゲットは女子高生です。マスクをしたままタピオカが飲めるように口のあたりにジップロックのジッパー部分をつけて開閉できる仕様になっています。また、耳が痛くならないようにしたかったので着なくなった T シャツの裾を使いました。マスク本体と耳紐は取り外せるので、どちらかが劣化してきても交換することができます。本体はペーパーナプキンを使用したため針と糸は不要で工作気分で作ることができます。

〈生徒 M 作品鑑賞後感想：生徒 Y〉

マスクを何らかの方法で穴が開くようにし、それをしながらの食事を可能にするというアイデアは巷でよく見るけれども、ここではジップロックのジッパーを再利用しているという点が非常に秀逸である。ファスナーやワイヤー口金を使用するのは誰でも想像できるけれども、ここでジップロックとは...。類まれなる発想だ。その低費用もさることながら、いつもなら使用後には捨ててしまうジップロックを再度使うことが可能になり、環境にもやさしい。また、女子高生をターゲットにしたという事だが、リバティー柄の素材を使うことでお洒落さが付加されており、女性が受け入れやすく楽しんで使用できるデザインになっている。外見からは手の込んでいる印象を受けるこの作品だが、本体はペーパーナプキンである上、製作する際に縫う必要がないというその手軽さは実用する際に最も重要視される点である。部品を交換できる構造がとられていることも、衛生が確立されており評価されるべきだ。女子高生にとって、彼女らが身につけるもののお洒落さは厳しく追及されるべきだが、過度に手間をかけることはできるならば避けたいと思うのは皆に共通しているだろう。そんな背反を実現させているのがこのマスクである。女子高生の皆さんには是非ともこのマスクを着用していただき、片手のタピオカと共に街を闊歩してほしい。

●環境性と機能に注目したマスク

〈生徒 A 作品〉図 5、6

テレビで子供（3、4歳）がマスクをつけている写真を見て、サイズがあってないなと思い、子供が装着するときにキツくできるようにすることを第一に考えた。またスーパーなどで買いためによるフードロスや生ごみの問題が増加してきているので、生ゴミを何らかの形で活用したいと考えた。玉ねぎの皮とアボカドの皮を使って一般家庭にある普通の鍋で染めた。たこ糸を使ってところどころ縛ることによって模様もつくっている。リボン（各家庭に余っている紐状のものなら代用可能。例：靴紐など）を使って頭上で結べるため、頭の大きさに関わらずつけることができる。

〈生徒 A 作品鑑賞後感想：生徒 R〉

生ゴミになりうるものを活用したいから玉ねぎとアボカドの皮で染物をするという発想がすごいと思いました。玉ねぎとアボカドで染めることができるのを知らなかったのととても驚きました。マスクのサイズが合っていないとつけている意味が半減してしまうと思うのでちゃんと頭の大きさに合わせて調節できるのがいいなと思いました。

●「飾る（ファッション性）」に注目したマスク

〈生徒 K 作品〉図 7

このマスクは母に向けて制作しました。新型コロナウイルスのことばかりで暗い毎日ですが、少しでもその不安を忘れさせてくれるようなユーモアのある作品にしたいと思い、見ただけで楽しくなれるクロワッサン風のマスクにしてみました。母はパンが大好きなので喜んでもらえると思います！

〈生徒 K 作品鑑賞後感想：生徒 A〉

この作品にまず初めに目を奪われるのは驚異的な写実性だろう。マスクという平坦な布が人目で立体的な大きなクロワッサンであると分かるのは作者の相当な技術の賜物だ。焦げ目や光のツヤなど色彩の表現が見事で、微妙な凹凸や左右での形状の違いでより本物らしさが演出されている。「見ただけで楽しくなれる」というコンセプトに完璧に合致していて、陰鬱としたコロナ社会の霧を吹き飛ばしてくれるような明るく素晴らしい作品だと思う。

●「飾る（ファッション性）」と「機能」に注目したマスク

〈生徒 A 作品〉図 8、9、10、11

一般的な白い不織布のマスクをつけている人は多いけれど、そういうマスクって見た目もダサいし、大多数の人と同じようになってしまうことも嫌ですよね。でも、だからと言ってマスクをつけないというのは感染予防上好ましくないじゃないですか。ファッションブラン

ドがおしゃれなマスクを出したり、ファッション好きの子がマスクを手作りしたりしているのを見ると、これからはマスク＝ファッションアイテムとしてアクセサリ的な位置付けにしてマスクをつけるということをポジティブに考えていくべきだと思うんです。なので私はその一環としてこのアゲハマスクを製作してみました。あと、このマスクは羽が大きくてソーシャルディスタンスも守れるので、そういうのも考えて生活してもらえたら嬉しいな～みたいな思いもあります。

〈生徒 A 作品鑑賞後感想：生徒 M〉

まずこれはパッと見で完成度とアイデアがすごすぎてとても驚きました。材料は本当にどの家にもあるようなものなのに何度見てもそうは思えないくらい素敵な作品だと思います。ソーシャルディスタンスを守れるようになっていて堂々とファッションとしてマスクを取り入れていけると思いました。

生徒より「自宅学習期間美術の授業があって本当に良かった。夢中で制作出来て家での時間が本当に楽しかったから。でも教室で作るのは違う。友人の作品や制作態度が自分にとって、とても刺激になっていたことに改めて気づいた。また学校で製作できる日が待ち遠しい。」

5. 終わりに 次年度に向けて

4年間行った「美術制作から学ぶ歴史」で、美術科、社会科の分野は近い点も多く、教科の垣根を超えて多角的に考えて制作することが出来た。授業の在り方は美術の授業の構成を取り入れて、対面授業では基本は生徒が主体的に進め、対話的に行った。しかし、1年間、週に1回の授業という限られた時間の中で、何の分野をどのように授業構成として行うかの選択は非常に重要だと感じた。また課題として、美術制作と歴史研究をさらに積み重ねた先にある新しい時代に生きる成果を目に見える形で表現したい。来年度から実施される「美術制作から学ぶ日本史」の中で、日本史の中の美術について両教科の相互関係をさらに深く考え、日本の文化や美術についてさらに追求し、新しい発見が出来る授業構成になるよう引き続き考えていきたい。

●他授業実践

・エジプト絵画様式で日常を表現

～エジプト絵画の特徴を捉えてコロナ禍の日常を表現～ 図 12、13、14

・名画のオマージュ 2022年度 芸術祭展示 ～自分との名画との境界線～ 図 15～20



図1 『聖セヴァスティアヌス』

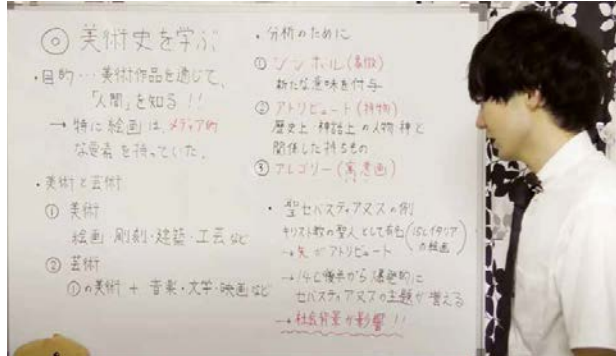


図2 YouTube にアップロードした動画の一場面



図3 生徒 M 作品



図4 生徒 M 作品



図5 生徒A作品



図6 生徒A作品

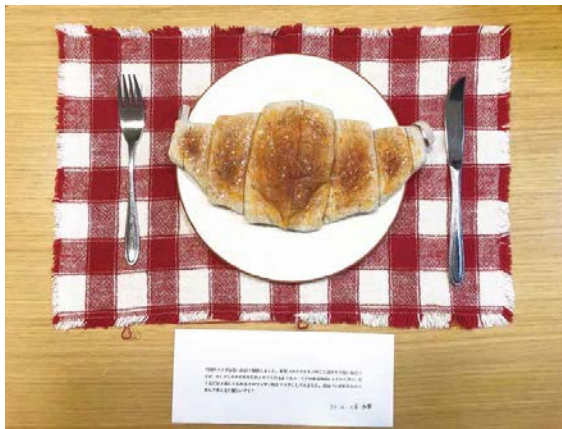


図7 生徒K作品



図8 生徒A作品



図9 生徒A作品



図 10 生徒 A 作品



図 11 生徒 A 作品



図 12



図 13



図 14

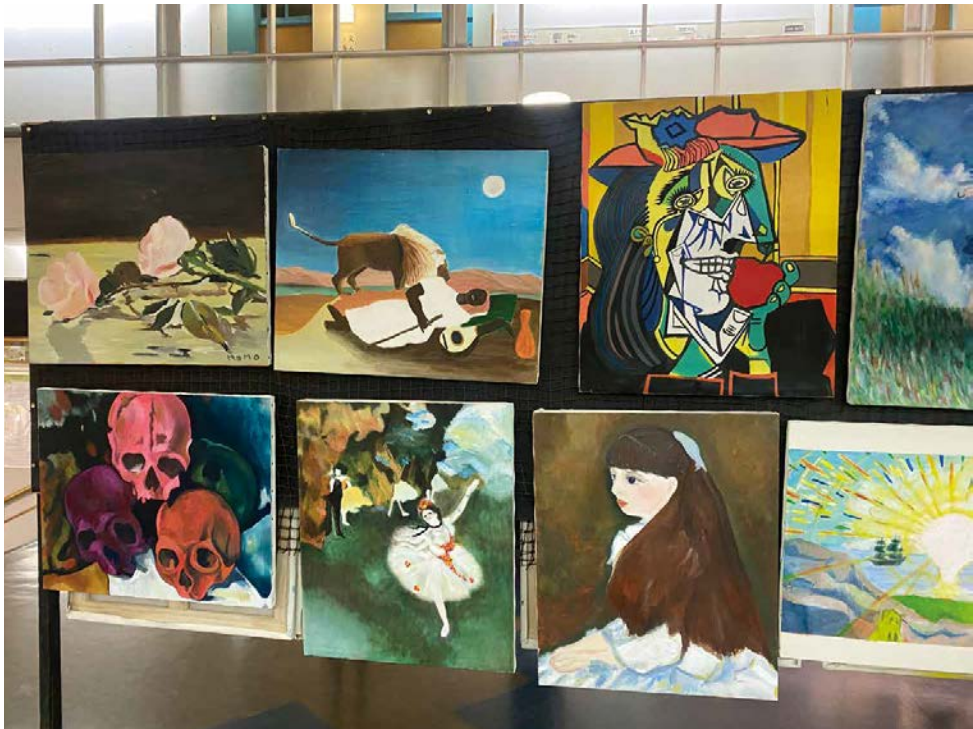


図 15



图 16

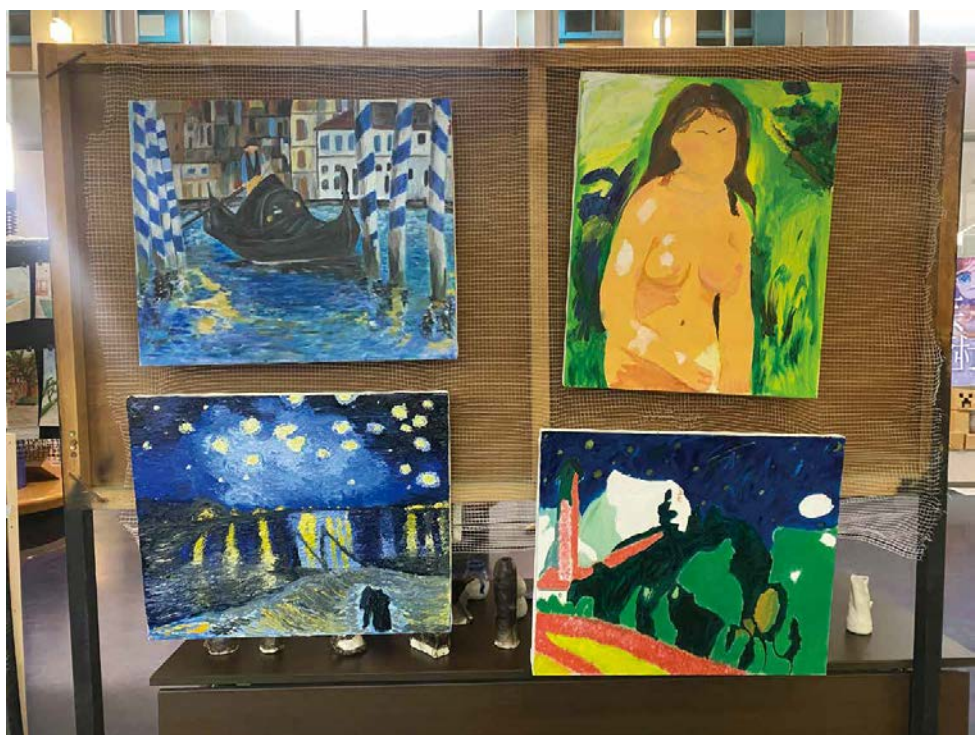


图 17



图 18



图 19

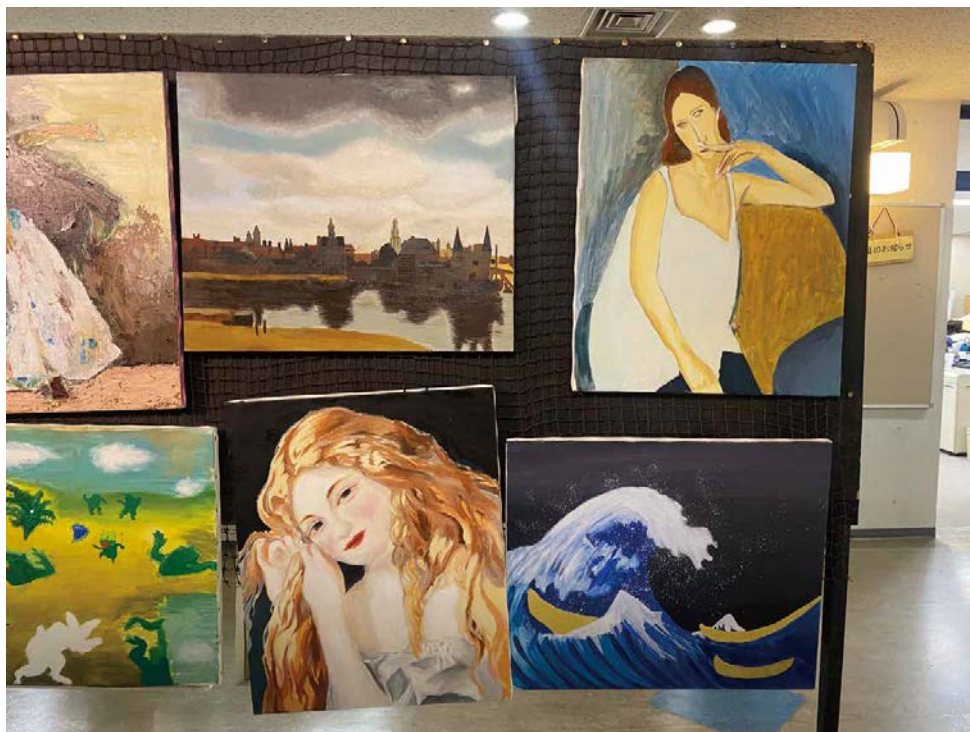


図 20

参考文献

- 池上英洋『西洋美術史入門』（ちくまプリマー新書、2012年）
瀬原義生『大黒死病とヨーロッパ社会 中・近世社会史論雑編』（文理閣、2016年）
大橋里沙子『教育美術』、公益財団法人教育美術振興会、2021年、46-52頁
村上尚徳『教育美術』、公益財団法人教育美術振興会、2021年、52頁

・高3特別授業「美術館に行こう！ エゴン・シーレ展」2023年2月16日（木）報告

学校での事前講義を経て、東京都美術館で実施されている「レオポルド美術館 エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」を鑑賞した。（図21、22、23、24）

<生徒感想>

- ・講義を受けてから絵を見たことで当時の時代背景やシーレの作風の特徴をより感じることができた。また、実際に見ることで筆跡の荒い部分や絵の具を厚く塗り重ねている部分などがよく見えた。これまであまり美術館に行ったことはなかったけれど、しっかりと勉強した上で見るとこんなにも楽しいんだなと思った。
- ・1900年初頭の絵は写実主義と印象派が混ざりあったような絵だなと感じた。エゴン・シーレの自画像はその時の彼の心情が繊細に表されているようで、沢山ある自画像が一つ一つ違うものに見えた。この時代からの絵はより庶民にも親しみやすい物になったのかなと思った
- ・美術館に来たことが減多になかったのも、あまり作品の善し悪しは分からなかったけれど、私には到底理解のできない芸術のあり方で感心した。100年以上前の作品なのに筆跡がそのまま残っていて不思議な気持ちになった。美術に疎い私でもエゴンシーレの作品は特徴的で、書いた人を見なくてもどれがエゴンシーレの作品か見分けがついた。
- ・肌の色に赤や青が足されたり、顔の輪郭が直線的だったり、筆跡が荒く厚塗りなだけで、印象派のような暖かく丸みのあるイメージからあんなにも尖っている訴えかけるようなイメージになるのだと思いました。印象派の絵は輪郭がぼやけていたり写真には映らない人の暖かさや清らかな感じが表されていたのに対して、ウィーン分離派はその更に奥にある人間らしい感じとか先生が講義で言っていたように色々な感情が込められている感じがして見ていて不思議な気持ちになりました。
- ・印刷物で作品を見ることと実際の作品を観ることは全く違うということを感じることができました。特に、エゴンシーレらの作品は厚塗りの作品が多く、真正面・横・下からの見え方が全く異なり興味深かったです。



図 21



図 22



図 23



図 24

